

過労と栄養失調で壊血病や赤痢にもかかったが、どうか耐えて二十一年九月、コロ島から乗船、佐世保に上陸した。

帰国するまでは、妻や子どもの安否は判らなかつたが、元気で帰っていたのではっとした喜びは今でも忘れられない。

妻は私が連行されたあとで五女を生んだが、その子はすぐ死亡し、その埋葬やソ連兵の侵入、鮮人のいやがらせ、子どもの病氣、食糧の欠乏等で苦勞したが、脱出の機会があつて、漁船をやとい、三十八度線海上突破し、南鮮を転々として、釜山で乗船、博多に上陸したが、二児の遺骨箱に隠してあつた時計や亡母の形見の指輪まで全部鮮人に取られ、無一文となつたとのことである。

高知に帰つて復職したが、借家住まいで、家財道具は皆無、茶碗から箸まで買つての耐乏生活で、長男、次男が生まれ、家族六人となり、薄給のため、妻は幼児を連れてのアルバイトで家計を助け、苦しい生活が続いた。

そして子どもは順調に成育し、今日に至つたが思えば、その間の苦勞は筆舌にはつくせないものがあつた。

技術者として残留

宮城県 鎌田末雄

昭和五年頃、米一石十七円五十銭、土工一日六十銭から八十銭、年貢米を納めるとやつと食べるだけの生活。

昭和六年六月、朝鮮咸興歩兵七十四連隊にはいる。九月十八日、満州事變が始まり、七年四月三日、出勤することになり、現地へ。八年六月まで転戦三十五回、ぶじ現隊で除隊。日本窒素興南工場の採用試験に合格した。

(六百人の中から三十人だけ採用)。九年四月、事變の勲功で旭八に賜金二百二十五円をもらう。二百円を兄に送つた。興南工場で、八年六月から二十年終戦時まで働いた。入社当時の日給は、一円三十二銭、三千立方メートルのガスタンク十六基もあつて、アンモニアガスを混合するガス係勤務だった。十四年結婚。

終戦となり、ソ連兵に全部接收され、社宅から着の身着のままで出され、応峰里という山中のオンドル間三疊

二間に二世帯入れられる。水道なしの深い井戸が一所あるだけ。ここに千二百人もの集団収容が始まった。ここは日本窒素で働く朝鮮人の社宅で、ここにいた人たちと入れ替えとなったわけである。一棟十軒、二棟に六十八世帯押しこめられた。

この晩からソ連兵が現れるようになった。夜の七時過ぎ、トラックがきて、一軒目に入り子どもにかけてたフトンをはがして持ち去り、三軒目に行き、リュックサック一杯つめこむなど。このとき、若い人がチエをはたらかせ「MPがきた」と言ったら、あわてて引き上げて行った。ソ連兵がきたら、カギかけて逃げることに。女は男の姿にするとか、鳴りもの入りでソ連の襲撃をしらせるとか、相談しあった。朝早く井戸からつるべで水を汲み、同居の中村さんと四キロ離れた新築中の朝鮮人の家に行き、カベ土ねりや稲こき、炊きもの、草取りなどの仕事をした。一日三円で三日で米一升。よいことは三食つきで、私たちの食べるものは雑穀入りだが洗面器のようなものに山もりくれるので、残りを一杯つめて、帰りを待つ家族にあたえたものだった。そのうち、米が一升

四十五円となり、十五日働いて一升しかもらえなかったが、残飯でしのぐ当時の生活であった。収容者の中には、畑を掘りおこして、のこりのジャガイモをさがす人もいた。こんなことで栄養失調や発疹チフスで死亡する者がどんどん出てくる。特に北満から南下した人たちは興南の収容所に入るや、つぎつぎと亡くなってゆく。応峰里山ろくに埋葬の壕を六尺幅で、深さも六尺。ここに四千人以上の方を埋葬したといわれている。板切れに名前を書いての弔い、重ね埋めで、近くにいた私たちは四回穴掘り、使役に出された。十五人ぐらいかついでとむらったことをおぼえている。が、私たちもここに入るのかと覚悟していた。配給の米を手にするには、十人単位で、貨車一台に石炭を積むノルマであった。それも券をもらい、四キロも離れた所まで行き、一日あたり二合五勺だった。私も栄養失調気味で、歩行に力なく、貨車積みにも何回も出た。朝、列をつくって仕事のわりあて、積みもの、トロッコで運ぶ者をきめるのである。前列の人のエリ首にシラミが何匹もはっているのが見えたり、石炭山にすてた大豆粕を拾って食べたり。反面、金のある日

本人は闇船を買って南下した。

二十一年四月頃、もとの勤務先の係から迎いの車がきて、会社の近くの社宅へ入れられた。同じ係にいた熊本出身の岩本さんと二人だけ技術指導をたのまれて残留することになった。約一年ほどやった。いよいよ引揚げの船がくるので会社から送別の宴とせん別金の八千円をもらった。

二十二年一月、佐世保港に着く。満州朝鮮の引揚げ者はまるで乞食姿、台湾引揚げ者は立派な姿だった。七十八歳の今日まで生きている。

北鮮より帰る

兵庫県 住 田 照 雄

昭和十六年七月、父の転勤のため、朝鮮咸鏡北道清津府に移転する。昭和二十年当時の家族構成は、父、母、弟、妹二人と従姉妹の計八人であった。八月十三日未明、その頃避難命令が出ていたが、人づてに解除と聞き、避

難先より自宅に帰り、昼食後、家族と話をしていたとき、銃弾の音がするので表に飛出し、漁港のほうを見ると、約百五十メートル前方に横一列でソ連兵が銃を撃っている姿が見えるので、さあ、たいへんと家族に知らせ、一目散にリュックサックを肩に避難、その後家には帰らず、羅南より無蓋車の避難列車に乗り、父の会社の事業所がある新浦で下車。二十日、保安隊より呼び出しがあり、日本刀及び武器の提出を求められた。九月一日、映画館に全日本人は収容され、土間に寝起きさせられ、食事の炊炊きも館内だし、便所にいたっては人数の割りに少なく、不衛生であった。二週間を過ぎた頃、「各人出発せよ」とのことで、出発前に保安隊で身体検査をされ、時計、高額貯金通帳、貴重品などは没収された。妹二人を背負い、ソ連軍のトラックが通るたびに身を隠し、部落を通るときには、幼児のおしめの中まで持物いっさいの検査を受けるため、海岸に出て海路で行くことにし、漁民と交渉して興南の漁港まで乗船することになった。興南に到着し、日本人会の人の世話で、山の中腹にある旧日本軍の監視所跡の兵舎に案内され、割り当てられた